



Title	日本人留学経験者が感じる「制限」とその対処
Author(s)	稲葉, 皐
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 21-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102262
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本人留学経験者が感じる「制限」とその対処¹

稲葉 皐

1. はじめに：留学という移動

21 世紀は「移動の時代」と言われている (Urry, 2007; 三宅, 2021)。人々は交通機関を使用し、国内、国外を移動する。その目的は多岐にわたり、仕事や観光、移住などが挙げられる (新井, 2021: 5)。また、インターネットやモバイル機器の普及に加え、新型コロナウイルス感染症のパンデミックで広く使用されるようになったオンライン会議などは、移動の時代におけるコミュニケーションを変化させた。移動する人々がいる一方で、自身が住んでいる場所を動かない、すなわち、移動をしない人々が存在することも事実である。しかし、このような人々もスマートフォンやテレビ等の情報通信機器で国内外の情報を目にする機会があるだろう。また、社会生活を営む中で、移動を経験した人々と日常的に関わっていると考えられる。

本研究で扱う留学は、母国以外の国で実際に生活しながら学校等に通うことから、一つの移動である。日本では、開国以降様々な目的で留学が行われてきた (石附, 1972)。21 世紀に入り、技術革新や、あらゆる分野で様々なヒト、モノ、カネが移動する時代に対応する人材として、グローバル人材の育成が求められるようになった。文部科学省 (2022) は、海外での経験や多様な価値観を持つ人々との交流が異文化に対する理解やアイデンティティの確立などにつながることから、「日本の未来を創るグローバル・リーダー人材を育成」するため、日本人学生の留学に力を入れようと試みた。このような状況により、感染症の拡大で海外に出向くことが一時的にできなくなってしまったコロナ禍まで、日本人の留学数は年々増えていた。留学は正規の学生として入学するものから、大学等で行われる交換留学、数週間の短期留学等、その種類は多様になっていた。日本人の留学経験者に関する研究は、留学によって向上した語学力や異文化コミュニケーションへの態度 (吉村・中山, 2010; 八島, 2012 など) や、留学経験がその後の収入やキャリア、雇用にもたらす影響 (新見・米沢・秋庭, 2018; 貝沼, 2018) 等の観点から蓄積されている。また、移動と留学に関する研究は、岩崎 (2021) が挙げられる。岩崎 (2021) は、言語ポートレートとナラティブ、インタビューをデータとして、英国から日本へ 2 回の留学経験を持つ対象者の言語アイデンティティについての研究を報告した。これらのデータの中では、対象者が学習者から言語の使用者アイデンティティへと言語アイデンティティを変化させた様子が示されている。また、留学中のみならず、留学後の経験からも、自身が成人アイデンティティへと変容していった様子を重ねている。このように、岩崎 (2021) では、留学という移動によることばの習得とアイデンティティの変容が分析されている。

留学という移動の経験では、母語以外の言語を習得できる可能性があり、また、岩崎 (2021) が示すように、そのアイデンティティに変化が生じる場合がある。加えて、現地での生活やそこで生活している人々との関わりを通して、留学経験者の考え方や価値観が変わっていくと考えられる。言い換えると、移動することによって生じたコミュニケーションを通して、自身や周囲の者の社会規範や価値観の相違、制度的な問題が浮き彫りになる。これらは移動を経験した留学経験者たちが、帰国後に感じる葛藤や困惑、母国の文化に対する批判等の考えは、彼ら・彼女らの自由なふるまいを制約する可能性が考えられる。本稿では、これらを留学経験者が感じる「制限」と捉えていく。

2. 研究目的とリサーチクエスション

本稿の目的は、留学経験者が留学という「移動」を経て感じた「制限」を明らかにすることである。加えて、その「制限」から、留学経験者にまつわる社会的な固定観念を明らかにし、留学経験者たちがどのようにそれらに対処しているのか実例をもとに解明する。

上記の先行研究は留学経験者の言語能力やコミュニケーションスタイル、留学後の動向を調査したものである。また、岩崎（2021）のように、インタビュー等を行い、複言語能力や獲得するアイデンティティの観点から日本に留学した人物を分析した研究が散見される。一方で、実際の日本人留学経験者の語りや、彼ら・彼女らのコミュニケーションを会話データから分析しているものは管見の限り少ない。また、留学によって培った語学力の向上や価値観の変化という肯定的な側面が描かれている研究が多い。しかし、後述のように、本研究の協力者は、留学を経て変化した自分自身と周囲の人々の反応から「制限」を抱えていることがあり、留学はかならずしも肯定的な側面ばかりではないと考えられる。

以上のことから、本稿では、①留学経験者たちは留学という「移動」を経てどのような「制限」に直面しているのか、②留学経験者たちはその「制限」をどのように受け止め、対処しているのか、という2点をリサーチクエスション（以下、RQ）として設定する。これらのRQに応えることにより、本研究では留学という移動を経験した日本人大学生のインタビューおよび会話データから、彼女たちの抱える葛藤を明らかにすることができる。

3. データと分析枠組み

本研究で扱うデータは、17名の日本人留学経験者および留学未経験者のコミュニケーションを記録しているものである。データの参加者は、留学経験者の会話場面の録画とインタビューを行うという目的で研究協力を依頼した。その後、協力者に留学経験者および未経験者の友人を紹介してもらい、調査者を含めた3人でのZoomミーティングを設定した。事前に調査協力のお願いと研究目的およびデータの取り扱いについて情報を共有し、同意を得た参加者にZoomミーティングのリンクを送った。また、データを録画する前に再度同意確認を行なった。ミーティングの流れは以下の通りである。前半に留学経験に関するインタビューを行い、後半に調査者が画面をオフにし、退出した上で、研究協力者のみでの会話場面を収集した。

本稿では、2024年2月に行われた日本人留学経験者3名によるインタビューおよび会話データから2つの場面を抜粋した（表1）。すべてのデータはZoomを通して録画され、そこで行われた会話は非言語行動も含めて詳細に書き起こされている。

表1 データ概要

抜粋	撮影日	参加者	年齢（調査時）	留学先	留学期間
1・2	2024/2/15	AM	22	オーストラリア	2023/2-2023/12
		MI	22	カナダ	2022/9-2024/4
		SI（調査者）	26	アメリカ	2018/8-2019/5
3	2024/2/21	SK	22	北欧	2022/8-2023/5
		SI（調査者）	26	アメリカ	2018/8-2019/5

本稿で分析するデータはそれぞれの参与者にとって 2 回目のインタビューおよび会話場面の収録である。2024 年 1 月 12 日に行った 1 回目の調査には AM、MI、SK の 3 人が同時に参加していた。その際に収録した会話の中で、AM が帰国後直後の親戚の集まりにて留学先の土産を渡した時に「英語を喋って」と言われたと話していた。本発表で扱うデータは上記について詳細を聞いている場面および、協力者に同じような経験の有無を尋ねた場面を抜粋している。

本稿では、Gumperz による相互行為的社会言語学を分析の枠組みとしてデータを分析する。相互行為的社会言語学は、発話を解釈するための枠組みとしてコンテキストに着目した Gumperz によって提唱されている。Gumperz (1982) は、コンテキストは会話を行っている参加者が相互行為を通じて生み出していくとしている。本稿は「会話のインタラクションを解釈する際に、人々がコミュニケーションを行うときに使う手がかりに特に注目 (岩田・重光・村田 2021 : 184)」する「相互行為的社会言語学」に基づき、談話を分析する際には、参与者の背景や彼女らが持つ社会文化規範等もコンテキストの一部として分析する。分析の際には、会話分析の細かい分析道具を活用するが、より広い社会文化的コンテキストも分析の枠組みに入れる。

4. 分析結果

4.1. 留学後に感じる周囲とのギャップ

抜粋 1 はオーストラリアに留学した AM とカナダに留学した MI に対して、約 1 ヶ月前に行われた 1 回目の調査にて、AM が帰国直後に親戚から「英語を喋って」と言われたと話していたことについて SI が再度尋ね、AM が回答する場面から抜粋が開始される。

抜粋 1) AM の語り

0024. SI: なんか、留学した人って英語喋れると思われがち。
0025. AM: う::ん
0026. SI: かな、[と。
0027. AM: [で、なんか、留学した身としては、まだまだ、なんか、
0028. それこそ不完全燃焼というか。
0029. SI: ((頷く))
0030. AM: まだ自分の、実力、なんか実感せずに帰ってきたのに、
0031. なんか日本だとすごい喋れる人みたいになっちゃって、
0032. SI: ((笑いながら頷く))
0033. MI: ((頷く))
0034. AM: バイト先とかでも、いや、なんか 英語ペラペラですか。ε
0035. みたいに聞かれて、
0036. ((首を振りながら)) いや、ペラペラじゃないですみたいな
0037. ε行った身としては、ε
0038. SI: うん
0039. AM: なに、なんかその、1 年じゃ、
0040. SI: う::ん
0041. AM: 現地の人みたいに喋れないんですけど、
0042. なんかすごい珍しがられるというか、

0043. SI: うんうん
 0044. AM: すごい. ((腕を振り下ろしながら)) 賢い存在みたいに
 0045. なっちゃって,
 0046. SI: @@
 0047. AM: そんなことないんだけどなって. (.) いつも思ってます.
 0048. SI: そうかそうか. そこでまたちょっと葛藤というか, うわあ.
 0049. うんプレッシャーというか
 0050. AM: 行った人なら多分わかるんですけど,
 0051. 行っていない人は
 0052. SI: うん
 0053. AM: なんかちょっと考え方というか. 感じ方が違うのかなと.
 0054. SI: う:::ん. なるほどなるほど, そうなんです.

まず、24 行目で調査者である SI が留学経験者は英語を話すことができると思われることが多いと話をまとめた。それに対して AM は 25 行目で「う:::ん」と言い淀みながら、27 行目から自身の経験を語り始めた。AM は、オーストラリアに留学した自分自身に対して「不完全燃焼 (28 行目)」であり、自身の英語の「実力を実感せずに帰国 (30 行目)」したにも関わらず、周囲の人から「すごい喋れる人 (31 行目)」としてみなされていると語った。その後、英語を話せる人物として扱われた経験について、34 行目から、自身のアルバイト先で「英語ペラペラですか」と聞かれたことに AM は笑いながら言及し、首を振りながら「ペラペラじゃない (36 行目)」と否定した様子を再現した。その後、留学経験者として、1 年の留学期間では「現地の人みたいに喋れない (41 行目)」のに、帰国後に日本で「珍しがられる (42 行目)」ことや「賢い存在 (44 行目)」とみなされ、自身は「そんなことない (47 行目)」と、周囲からの肯定的な評価を否定していることがわかる。このことに対して SI が、留学経験者は他社からの評価に対する葛藤やプレッシャーを感じることがあると 48、49 行目でまとめると、AM は「行った人なら多分わかる (50 行目)」と、留学経験者に連帯感を示し、「行っていない人 (51 行目)」である留学未経験者は「考え方 (53 行目)」や「感じ方が違う (53 行目)」と結論づけた。留学はその期間や訪れる国、形態にさまざまな種類がある (日本学生支援機構, 2024)。AM は 1 年という短い期間で英語のネイティブスピーカーのように話すことは不可能であると考えており、自身の英語力もそのようなレベルに達していないと捉えている。そのような状況にも関わらず、日本では周囲から留学すると語学ができるようになり、珍しく、賢い存在になるというポジティブな評価をつけられており、留学未経験者との考え方や感じ方の相違を認識していることがわかる。また、AM は同じ留学経験者ならこの状況を理解できるとも考えていることが見て取れる。

次に、AM の語りの直後に MI が自身の経験を述べる場면을抜粋 2 として分析する。

抜粋 2) MI の語り

0055. SI: ありがとうございます. え. MI さんはどうですか.
 0056. そういう経験ありますか. 英語喋ってよって言われるような.
 0057. (1.9)
 0058. MI: そうですね. なんか. (0.5) むちゃぶりですごい喋らされるとかは

0059. あんまり えないんですけど::え .h なんか 家族に,
 0060. なんか. お姉ちゃんとかに面白半分で今から英語で喋ろうって
 0061. AM: ((頷く))
 0062. MI: 言われたり. とか::
 0063. MI: まあ. そんぐらいですね.
 0064. SI: ((頷く))
 0065. MI: でもなんかその実際に喋るっていうよりかは, 親戚とかで集まっても,
 0066. SI: ((頷く))
 0067. MI: なんか, あ留学行ったから,
 0068. AM: ((頷く))
 0069. MI: あもうなんかすご::いみたいな
 0070. AM: ((頷く))
 0071. SI: ((頷く))
 0072. MI: 感じになって, まあ留学ってまあ色々あるし,
 0073. SI: [((頷く))]
 0074. AM: [((頷く))]
 0075. MI: 私の場合は交換留学で短かったので,
 0076. SI: [((頷く))]
 0077. AM: [((頷く))]
 0078. MI: .h なんかめっちゃ何か成し遂げたっていうよりかは, なんか.
 0079. (0.4)
 0080. MI: 経験できたな:
 0081. AM: ((頷く))
 0082. MI: ぐらいだから,
 0083. AM: ((頷く))
 0084. MI: まあ. 結構, そうですね, 留学行ったからすご::いみたいな感じで
 0085. 思われる, なんか誤解されることはなんかあるなって感じです.

調査者である SI が MI に対して、55 行目から AM のように周囲の人から英語を話してほしいと言われた経験があるかと尋ねた。すると、58 行目から MI は自身の経験を語り始めた。MI は英語を話すことを強要される経験は少ないものの、姉から「面白半分 (60 行目)」に英語を話そうと言われることがあると述べた。このように、実際に話す姿を見せることを求められることは少ない一方で、親戚などから「留学行ったから (67 行目)」「すご::い (69 行目)」と、留学経験を持っていることが大層なものであると親戚から評価を受けた経験を語った。このことに対して、AM は、「留学ってまあ色々あるし (72 行目)」と前置き、「短かった (75 行目)」交換留学期間では「めっちゃ成し遂げた (78 行目)」というよりも「経験できた (80 行目)」ことが多いとした上で、「留学行ったからすご::い (84 行目)」と思われ「誤解されること (85 行目)」があると述べた。先述の通り、留学の種類は様々なものがあり、MI は AM と同様に自身が行なった交換留学の期間を短いと捉えている。このような短期間で達成できることは少なく、それよりも留学に行き、現地で実際に経験できることの方が多いと考えているとわかる。MI にとって留学は「すごい」ものでは

以上のように、AM と MI は、留学経験者である自分自身と留学未経験者との間に考え方の相違や誤解があると認識していることが明らかになった。次節では、北欧に留学した SK の語りから、留学経験者自身も未経験者の考えが理解可能であると同時に周囲から固定観念的なイメージを持たれていることを明らかにする。

次に取りあげる抜粋3は、北欧に留学したSKのインタビュー場面である。1回目の調査でAMが帰国後親戚から「英語を喋って」と言われたと話していたことについて、SKにも同様の経験がないかSIが再度尋ねたところ、SKは「留学に行ったから英語を話すことができる」と言われたことはあるが、「英語を喋って」と言われた経験は一切ないと述べた。その後、SIが北欧に留学に行ったからこそかけられた言葉などはあるかと尋ねた直後から抜粋した。

0035. SI: なんか、なんだろう、(北欧)に行ったからかけられた言葉というか、
0036. そういう、英語話してよとかではないですけど、
0037. SK: ((頷く))
0038. SI: なんかそういうのってありますか。帰ってきてから。
0039. (1.7)
0040. SK: でもね、〈1 番〉はやっぱ。@@ £寒くないの。£
0041. SI: @@@
0042. SK: £とか、hh @@ サウナ、サウナは <どうなの.> とか::£
0043. SI: ((笑いながら頷く))
0044. SK: なんかもう、そういうところですね。全然。こう、
0045. (1.2)
0046. SK: う::ん、なんか(北欧)の中身っていうよりも、こう、なんか。
0047. SI: ((頷く))
0048. SK: 外から見た感じのイメージというか、
0049. SI: ((頷く))
0050. SK: なんかやっぱ。知らない
0051. (0.8)
0052. SK: ことが多いじゃない [ですか::.=
0053. SI: [((頷く))
0054. SK: =なんかアメリカとかイギリスだったら結構こう、
0055. SI: ((頷く))
0056. SK: ニュースとかにも出てくるけど::..hhh
0057. (北欧)ってほんと未知の世界な感じが多分
0058. SI: ((頷く))
0059. SK: みんなしてて、でもなんかこう、聞いたことはあるみたいな

0060. SI: ((頷く))
 0061. SK: 国なので,
 0062. SI: ((頷く))
 0063. SK: そこについてなんか,
 0064. SI: ((頷く))
 0065. SK: えっ, 本当にこんなのか. みたいなの. (.) はよく聞かれますね.
 0066. SI: へえ. 確かに私も行ったことないからわからないこと. (0.6)
 0067. £でも同じこと£ 聞かかも. 寒い. (0.3) かな.: :とか
 0068. @@@@
 0069. SK: ですよ.
 0070. SI: 確かに. うん,
 0071. SK: ((頷く))
 0072. SI: (SKの留学先にまつわる人物) いたとかそういう話を.
 0073. SK: ((頷きながら)) うん
 0074. SI: ああそうですね. 確かに. あんまり
 0075. SK: ((頷く))
 0076. SI: 知られてない国だからこそ,
 0077. SK: ((頷く))
 0078. SI: そんな感じの質問になるのかな, うんうん
 0079. SK: ((頷く))
 0080. うんと思います.
 0081. SI: うんうん
 0082. SK: なんか私も, 私, (北欧)の, この留学で初めて
 0083. (北欧)に行ったんですけど, £行く前まじでわからなかった. なにも. £
 0084. めっちゃ気持ちわかるなと思って.: :
 0085. SI: @@@@

調査者である SI が北欧に行ったからこそ周囲からかけられた言葉があるかと抜粋の冒頭で尋ねると、SK は「でもね (40 行目)」とターンを取り、「一番 (40 行目)」聞かれることとして寒さについて尋ねられると笑いながら述べた。加えて、「サウナは <どうなの.> (42 行目)」と、北欧を代表する文化の一つであるサウナについて質問されることに言及し、北欧留学に対してかけられる言葉として例を挙げた。これらの言葉について、SK は「(北欧)の中身 (46 行目)」よりも「外から見た感じのイメージ (48 行目)」であると述べ、北欧は「ニュースに出てくる (56 行目)」ような「アメリカとかイギリス (54 行目)」と異なり、「知らないことが多い (50-52 行目)」国であると語った。また、北欧は「未知の世界な感じ (57 行目)」がある一方で、様々な人々が「なんかこう、聞いたことはある (59 行目)」国であると SK は考えていることが見て取れる。このような「未知の世界 (57 行目)」に対して「本当にこんなのか (65 行目)」と、実情を尋ねられることが多いと述べた。このことに対して、SI は、66 行目から自身も北欧に行った経験がないため、「同じこと (67 行目)」を聞く可能性があることを示唆した。また、SK の留学先が「あまり知られていない国 (76 行目)」であるからこそ周囲の人々が同じような質問をすることについて考えを述べ

た。SI の返答を受け、SK は、自身も留学先の国には初めて訪れたと述べ（82-83 行目）、「 ϵ 行く前まじでわからなかった. なにも. ϵ （83 行目）」と、笑いながら同意を示し、「めっちゃ気持ちわかるとって: :（84 行目）」と、共感を示した。このことから、米国や英国のような「ニュースに出てくる（56 行目）」馴染みのある留学先に対して、北欧は、留学前の SK にとって「未知の世界（57 行目）」であり、周囲から寄せられる反応も留学前の自身と重なり、理解することが可能であると考えていることがわかる。一方で、周囲の留学未経験者からかけられる言葉は SK が留学で培った言語能力や経験よりも北欧の国に対する「外から見た感じのイメージ（48 行目）」であることが多く、固定観念的なイメージを付けられていると明らかになった。

5. 考察と結語

最後に、分析をまとめ、考察として RQ に回答する。まず、一つ目の RQ である「留学経験者たちは留学という「移動」を経てどのような「制限」に直面しているのか」について、上記の分析から、留学経験者たちはそれぞれが周囲の留学未経験者との間に考え方の相違や固定観念的なイメージを付与されていることが明らかになった。例えば、オーストラリアに留学した AM や、カナダに留学した MI は、留学期間の短さや語学力の不足という自身の認識に関わらず、周囲から「英語を話すことができる」人物であるとみなされており、「留学はすごい」や、留学経験者は「賢い存在」とであると評価されていることに言及した。また、北欧の国に留学した SK は、北欧は「未知の世界」とであるという認識から、留学経験者自身の経験ではなく、固定観念的な「外から見たイメージ」を尋ねられることが多いと述べた。これらのことから、留学経験者が感じている「制限」として、留学は大層なものであり、留学先の国やそこで行なった経験はよくわからないものとして周囲から捉えられていることではないかと考えられる。移動を経験していない留学未経験者たちから留学経験者自身の能力や留学経験に関係なくイメージとして評価されていることは、留学を経て変化した留学経験者個人を十分に鑑みていないと考えられる。

このような状況に関して、2 つ目の RQ である「留学経験者たちはその「制限」をどのように受け止め、対処しているのか」に回答する。本稿では、留学は大層なものであり、よくわからないものであると留学未経験者から固定観念的に評価されていることが「制限」とであると指摘した。留学未経験者たちはこれらのイメージを誤解であると否定する様子や、一方で周囲の人々の考えに対して共感する様子が本稿の抜粋に見られた。つまり、留学経験者たちはこのような「制限」に対して、留学未経験者たちは周囲の人々と考え方の違いを認識し、自身の体験を振り返りながらその「制限」に理解を示すなどで対処していると考えられる。本稿で明らかになった、留学経験者が感じている「制限」は、留学経験者たちの帰国後の行動になんらかの制約を課す可能性があると考えられる。例えば、本稿で抜粋したデータは、AM が親戚から英語を話してほしいと言われた経験があると語っていたことについて尋ねる質問に答える場面であった。留学経験者の中には、周囲からの期待に応えるために英語を話す姿を披露した経験がある人もいた。また、それらの期待を誤解である感じ、否定している様子から留学経験を評価されることに必ずしも肯定的な態度を示すわけではなかった。加えて、SK の語りからも見て取れるように、英語圏への留学に重きが置かれ、北欧などの国は留学先として「未知の場所」とであるとされている。実際には、留学先は多様であるにも関わらず、階層が生まれていることが考えられる。留学経験者は周囲からの期待や付与された固定観念的なイメージと、移動を経験した自身の自己評価との差に違和感や困惑を覚えている場面があると考えられる。

「移動」が常態化している現代では、様々な国に出向き、それぞれの言語を学習することや、異文化を経験できる状況になっている。また、留学生として現地に身を置くことで留学経験者の価値観等は変化する。今後は多様な留学経験者が感じる「制限」を明らかにしていく必要があると考える。

参考文献

- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石附実 (1972). 『近代日本の留学史』, ミネルヴァ書房
- 岩崎典子 (2021). 「言語ポートレートから見る多層アイデンティティ – 「アイデンティティの戦争」から複言語使用者へ」 三宅和子・新井保裕 (2021). 『モビリティとことばをめぐる挑戦 – 社会言語学の新たな「移動」』, ひつじ書房. pp. 245-267.
- 岩田裕子・重光由加・村田泰美 (2022). 『社会言語学 基本からディスコース分析まで』, ひつじ書房.
- 貝沼千徳 (2018). 「留学のキャリア・雇用に関するインパクト～日本企業は留学経験者をどうみているのか～」 横田雅弘・太田浩・新見有紀子編 (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト 大規模調査による留学の効果測定』, pp.211-235. 学文社.
- 文部科学省 (2022). 「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性～コロナ禍で激減した学生交流の回復に向けて～」 https://www.mext.go.jp/content/20230323-mxt_kotokoku01-000028546_3.pdf (閲覧日: 2025 年 5 月 15 日)
- 三宅和子 (2021). 「モビリティ、21 世紀に問われる社会言語学の課題」.
- 三宅和子・新井保裕編. (2021). 『モビリティとことばをめぐる挑戦: 社会言語学の』
- 新見有紀子・米澤彰純・秋庭裕子 (2018). 「留学経験が収入や職業キャリアにもたらす効果」 横田雅弘・太田浩・新見有紀子編 (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト 大規模調査による留学の効果測定』, pp. 156-178. 学文社
- 八島智子 (2012). 『外国語コミュニケーションの情意と動機: 研究と教育の視点』, 関西大学出版部.
- 横田雅弘・太田浩・新見有紀子編 (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト 大規模調査による留学の効果測定』, 学文社.
- 吉村紀子・中山峰治 (2010). 『海外短期英語研修と第二言語習得』, ひつじ書房.
- Urry, J. (2007). *Mobilities*. Cambridge: Polity. (=2015, アーリ, J. 吉原直樹・伊藤嘉高(訳). 『モビリティーズ: 移動の社会学』, 作品社.)

トランスクリプト記号

(1.0)	1.0 秒の音声のない状態	ヨンの上昇
=	途切れなく密着した会話	h 呼気音
[発話の重なるの開始	.h 吸気音
:	直前の音の引き延ばし.	£発話£ 笑いながら発話
.	下降イントネーション	@ 笑い
,	継続調イントネーション	<> ゆっくりとした発話
↑	直前の発話の顕著なイントネーシ	(()) ジェスチャー等の非言語行動

¹ 本研究は 2024 年 9 月 14 日に開催された社会言語科学会シンポジウム第 5 回スチューデント・ワークショップ「第 4 室 移動とことばの諸相—移動における「制限」を軸に」の発表に大幅な修正を加えたものである。